造形体験の中で見つけたよさを友だちと共有し高め合いながら，表現の追求をしていく子ども

― 小学４年「ふわふわくねくね風からのおくりものをつくろう」の実践から ―

１　題材のねらい

ビニール袋が風を受けた時の，ふくらんだ形や動きの面白さを味わうことで，動く立体としての魅力に気付き，発想や構想を広げたり深めたりしながら，感性をはたらかせて造形表現を追求する力を高める。

２　授業の構想

⑴ 子どものとらえについて

次の文章は，「土で絵を表すおもしろさを発見しよう」２時間目の学習活動後の日記である。

> 今日，図工で，すなで絵の具を作りました。さいしょにすなみたいな物を見せられた時は，なんだろう？と思っていたけど，土と聞いておどろきました。それに，先生がぬってみたら，けっこうぬれました。その後に，そのすなを見つけに行って，石とすなに分けました。次は絵の具を作るのですごく楽しみです。赤すなでもやってみたいです。すごく楽しかったです。　（児童Ａ）

児童Ａは，教師が示した素材としての土との出会いの中で，対象をじっくり観察し，粒の小ささや塗った時の表面の様子から素材を「砂」ととらえた。その後，土を採取して同じような土の絵の具を作ってみる活動では，同じ物を作るだけでなく，別の色の土に注目して，それもやってみたいと意欲を高めていることがうかがえる。土を自然物としてだけでなく，描画素材の絵の具としてとらえ直し，「色」や「形」の視点から追求しようとしている。この様子から，子どもが素材に触れながら色や形の特徴を細かくとらえていることが分かる。

⑵ 本題材の内容と図画工作・美術科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本題材で思考力・判断力・表現力を育成する視点で子どもの姿をとらえるとき，次のような学習活動の姿が考えられる。

風を受けてふくらんだり揺れ動いたりするポリエチレン袋などの軽量素材にふれ，生活や学習の体験と結びつけて発想したり，つくりたい物を構想したりする。これまでの造形体験から判断していかす姿が期待できる。

また，ポリエチレン袋などが風を受けてふくらんだり揺れ動いたりする様子を見て気付いた面白さと，そこからイメージし，つくりたいと思ったオブジェの表現について，様々な素材を組み合わせるなどして試したことから，有効と感じた表現方法を取捨選択する。これにより，活動の中で試したことから判断していかす姿が期待できる。そして，自分や他者の学び方や表し方のよさを肯定的に認め合い，発想や構想を見つめ直し，工夫を重ねて，より豊かな表し方に迫ろうとする。子どもたちは，自分の考えや友だちの考え・評価から判断していかすことができる。子どもたちのこのような姿を大切にしながら，学習活動を進めたいと考え，本題材を構想した。

風の効果から見出される動き，試しているものの形に関わるイメージや，表そうとしていることの意図，考えや理由を自分なりに表す図や言葉に着目する。そして，自分の表したいことや仲間が表そうとしていることを感じ取り，形を手掛かりにして伝え合うようにかかわり合う。

このように，身近な友だちとかかわり合い，学級全体で学び合うことが，立体に表す活動や鑑賞についての感性を高め，発想や構想に深まりや広がりを与える。そして，造形表現における思考力・判断力・表現力が育成されるものと考える。

⑶ 思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

学びをいかすことに焦点を当てた思考力・判断力・表現力を本題材の中で育てていくために，次のような学び合いの場面を構想した。

図画工作・美術科において学びをいかすことは，自己実現としての自らの造形表現を展開させ追求する姿に見て取ることができる。

○ 体験や他者との交流から表したいことを発展的に見いだすこと

風を受けてふくらんだり動いたりするポリエチレン素材など，本題材で扱う多様な素材を子どもたちが使って十分に遊び，遊びながら素材の特性や加工の可能性，動きや形の特長を味わうようにする。自分が興味をもっていることやよいと感じることを明らかにすることができるようにする。また，この素材体験活動を単独で行うのではなく友だちと共同することにより，考えが整理統合されたり，自分には思いつかなかった造形表現の可能性を見いだしたりすることができる。

○ 題材を越えて，学んできた知識や技能を活用すること

これまでに子どもたちが営んできた生活場面や学習場面の中には，本題材の素材や表現主題につながりうる知識や技能が多く蓄積されている。友だちと共に素材体験をする中で，その中から有効なものが呼び起こされ，閃きという形で子ども相互の中や教師とのかかわりの中で提案されてくることが多い。その価値を教師が認め，子どもが共有した時，学びはいかされ，思考力・判断力・表現力は刺激され，育成される（**図１**）。

図１：みんなで試すようす

○ 表現テーマに向かって自己の造形表現を高めること

子どもたちの興味や関心から生じた造形表現への漠然としたイメージは，「素材」「表現方法」「表現テーマ」が明確になるに従い，具体的なものへと変容し，作品へと近づいていく。その中で，子どもが，表したいと考えていることやより美しいものを求めて試行錯誤や取捨選択を繰り返し，自己の造形表現を高めていくことができる。試行錯誤や取捨選択の行為の中で，体験から獲得されたことがいかされていく。

このように，初等部後期では，子どもたちが造形表現の課題について構想を立て，表現の意図を説明したり構想についての考えを交わしたりして，自他の表現を評価・改善していく活動を大切にするようにしている。

図画工作・美術科において学びをいかすためには，自分が追求している造形表現についてだれよりも自分が知ることができるようにする。そのための教師のはたらきかけを明らかにすると共に，子どもの学びの姿をつぶさにとらえることを大切にする。

○ 子どもの考えや感じ方を明らかにし，より広げ深めていく

子どもたちが自分の造形表現について発想や構想を豊かにもち，それを基にして造形活動を展開させ追求していく力を身に付けるためには，まず，子どもたちが自分自身の造形表現活動についてを，しっかりととらえることができるようにしたいと考えた。子どもが何を表したいと感じ，何を表そうと意図し，発想や構想についてどのように考えているのかを明らかにする。そのために，ポートフォリオとして子どもの考えと，画像やスケッチを集積し，子ども自身がそれまでの取組について振り返り，確認することができるようにする。ワークシートを活用して，子どもたちが自分の造

形表現の足跡や工夫改善していく過程を自らとらえ，評価し，次の活動に向けて発想や構想を発展的に更新しながら，造形表現への意欲を高めることができる。

○ 授業と子どもの活動を評価し教師のはたらきかけに反映させていく

子ども自身が自らの学びを明確にとらえることは，同時に教師が子どもの学びをとらえ，子どもの活動やその結果から授業を評価することにもつながると考えた。本学級の子どもたち一人一人にどのような表現に対する必要感があるのか，また，今後どのように表現を展開させていきたいと考えているかをつぶさに拾い上げるためには，子どもたち自身にそれらを十分に把握できるような機会と場が必要であると考えた。

したがって，学び合っている場面での子どもたちの発言やふりかえりの場面での記述を大切にする。そのために，子どもたち一人一人の学びについてのとらえをワークシートや観察から評価規準を基に行い，その変容をとらえていくこととした。

○ 学級全体で学び合う時間を充実させていく

学級全体で共通の論点や視点をもって，よりよい表し方についての考えを伝え合う場面を設定することで，学級全体で学び合ったことが子どもたち一人一人の取組に還元され，発想や構想が確認されたり，更新されたりする。

子どもが表したいと考えていることについてのたくさんの発見やつかみ取った方法から判断して，取捨選択していきながら，自分にとって満足しうる造形表現を追求する姿の実現を期待できると考えた。

3　展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は，学び合い）
1	・風でふくらむ，動く，面白い形を味わおう。	1 2 3	・風を受けて動く袋を見たり触ったりしながら，表現テーマの魅力を味わう。 ・身近な材料をいかして表したいものを考える。
2	・風でふくらみ動く形をつくろう。	4 5 6	・ビニール袋やポリエチレン素材をつなぎ合わせて試行錯誤し，組み合わせの面白さや風で動く動きのおもしろさから発想し，つくりたいものを見付け出す。 ・表したいことを見付け，材料や作り方をいかして作品をつくる。
3	・作品をよくする工夫をしよう。	7 8 9	◇構成された立体物から連想したり，形の特徴や組み合わせの様子や動きから感じたりしたことを言葉で伝え合う。 ・自分の意図や考えと友だちの見解を比較しながら，形や動きのおもしろさを見付け出し，発想を広げながら自分の表し方の参考にする。
4	・作品を味わおう。	10	◇材料の組み合わせによる形のおもしろさや風を受けて動く動きのよさなどについて，色や形を手掛かりに，作品を紹介し合う。

4　授業の実際

(1) 素材・表現方法との出会い（第１次～第２次）

以下に示す授業後のふりかえりは，単元の導入時のものである。素材としての「風」とそれを目に見えるものにする「材料」との出会いの場面を児童Ｂは十分に味わい楽しんでいる。

> 今日は図工で，風を使ったことをしました。ぼくたちはの班は，セロファンを大量に使い，かさ入れのふくろにセロファンを入れ，空気を入れてゴムでしばり，ふれば，すごくきれいになると思ったからです。また，次の図工も工夫したいです。　（児童Ｂ）

第１次では，風そのものや素材に出会う場とした。十分に手や体の感覚をはたらかせて風による素材の動きや風でふくらむ袋の形をとらえ，動きや形の見立てからイメージをふくらませるための活動を行った。

（略）…カラーセロハンを細かく切ってみました。全く飛びませんでした。飛ぶかわりに，送風機に入ってしまったのでやめました。次は，ふつうに，ふくろをふくらませました。おもしろくなかったので，ふくろの先を両方結んで，ねこのようにしました。そしたら，別な物のようになりました。（略）…Ｓちゃんが，紙コップをもってきました。すると，なんとおもしろいほど飛びました。（略）…しかし，もう少しおもしろくしたかったので，カラーセロハンで，ひらひらさせてみました。つばさをつけたら，かなり飛びました。でも，まだまだかなぁ…と思いました。（略）…また作り直したいなぁ…と思いました。たこのような物も作りたいなぁ…と思っています。（児童Ｃ）

児童Ｃは次々と素材を試し，友だちと共同する中で，自分の感じるままに表したいことや工夫したいことを見付け出そうとしている。心の琴線に触れるものに出会うと，製作の見通しについて大きく前進する姿が見られた。このように多くの子どもたちが次への展開への手掛かりを見いだし，意欲を高めていた。第２次以降の作品作りに向かうに際して，この造形体験の時間は大きな役割を果たしている。

次の文章は，本単元３，４時間目の学習活動後の日記である。

新しい発見をしました。最初は，これを作ろうと思って考えていたけど，失敗してしまいました。青と赤と緑のボンボンを作る材料を，何か使いたいと思ったので，あまったプラスチックコップに４本ぐらいに分けて３カ所につけました。送風機をオンにすると，フワリとうかんで，落ちると思ったら，ひらひらしながらくるくる回ったり，うきあがって落ちてまた回ったり，よく落ちたりしたけど，新しい発見ができてよかったです。（児童Ｄ）

ぼくは今日三つのことを工夫しました。一つ目は，Ｍ・Ｔ君のアイデアをさらに工夫して，ふくろの中を出して，そこにテープをまき，元にもどせば，外ばかりではなく，内もきれいです。でも，何か物足りないと思い，大きなふくろにそのふくろをつけたら象みたいだったので，目と耳をさらにつけたしました。これが二つ目の工夫です。三つ目は，コップを使い，空気を通りやすくしたことです。また，次の図工では，象の体や足も工夫して作りたいです。（児童Ｅ）

児童Ｄと児童Ｅは，「風からのおくりもの」が何であるかをとらえて，そのよさや面白さについて，友だちと学び合い，試行錯誤を繰り返した過程をたどりながら，自分の気付きや考えを振り返っている。そして，「風からのおくりもの」について「形」や「動き」を視点に考え，表そうとしていることをはっきりさせる手立てとして，イメージ文に言語化した。子どもたちの中には必要なことがらを見つけてつけ足していくだけでなく，見直した上で不要な物をそぎ落としたり，重さについての課題から軽量化を図るために作り方を変更したりするような追求の様子も見られた。この日のふりかえりや日記には，「もっと工夫したい。」「物足りない感じがする。」などの言葉が多く見られ，追求しようとしている造形表現への意欲の高まりが感じられた。

(2) 構成された立体物から連想したり，形の特徴や組み合わせの様子や動きから感じたりしたことを言葉で伝え合う（第３次　７時間目）

第２次から第３次では，素材の特徴や風を受けてできる形や動きについてイメージしたことをもとに，ポリエチレン袋などの素材を組み合わせたりつなげたりして立体に表す活動を行った。試行錯誤を繰り返しながら，気付いたことや感じたことを友だちと共有し，発展させる場として，学級全体で学び合う時間も設定した。教師が掘り下げるはたらきかけを行うことにより，意見を交換し合い，どうしてそのように感じたのか，自分の感じ方はどうだったのかなど根拠を明らかにして

しっかり交流することができた。教師が子どもの学びについてとらえるべき姿を明らかにし，子ども自身にその自覚をうながすように問いかけ，「掘り下げる」などのはたらきかけを行うことで，下記のふりかえりにあるような，学びをいかす姿が多く見られた。

> （略）…スズランテープをすごく長くして，ビニールのはしとはしを切ったら，上の方でビニールがひらひらして，見た人が「きれい。」とか「おもしろい。」と言ってくれました。「ちょっと工夫するだけで，こんなにちがうんだな。」と思ったので，次はさらに工夫してもっときれいにしたいです。（児童F）
>
> （略）…わたしは，工夫をたくさんしました。一番工夫したのは，パラシュート的なものを作ったことです。（略）…画用紙でパラシュートにのせる人間の形を作ろうと思っています。それでも飛ぶのか，どっちの方がよく飛ぶのかなど，見てみたいです。みんなのを見に行った時には，空気を入れたら分かる形があって，それも新しい発見だなと思いました。（児童G）

このように，自分や友だちの表し方やその意図を十分にとらえることができれば，以降の自分の作品に向かう展開の中で，必要感をもって仲間に関わろうとする姿が期待できる。ふりかえりの場ではワークシートを用いて，自分の考えを確認したり新たな構想をつかんだりすることで，意欲を高めることができた。

表１：本学級の子どもによる自己評価（第３次７時間目）

・自分や友だちの表現のよさが見つかった。	82%
・意見交換で表したいことがはっきりしてきた。	79%
・次の活動でやりたいことがはっきりしている。	91%
・前回よりもよい表現になった。	90%

> ねこを集中して作りました。作っていたら，みんなが「うさぎ？」と行ってきました。うさぎならもっと耳が長いからちがうのになぁ…と思いました。でも，ねこといってくれた人もいました。全員に，ねこと言ってほしいので，すずをつけようと思っています。作って，どんどん考えていくのは，楽しいなぁ…と思いました。（児童C）

> ふくろの中で，いろんな形を作ってそれを景色にしたら，おもしろいのが作れそうだなーと思って，海をイメージしました。今日は，やしの実，やしの木を作りました。もっとおもしろくなるのを作りたいです。空気ばっかりじゃなくて身近にある物もうまく利用し，おもしろさをましていきたいです。（児童F）

図２：児童Ｃの作品

授業後の自己評価からは，９割近くの子どもたちが，自分の追求について見通しをもち，取り組んでいることが分かる。依然として高い意欲が続いていることもうかがえる。また，上記のふりかえりからは課題を見いだし，次の活動に向けて構想をもつ子どもの様子が見える（**表１**）。

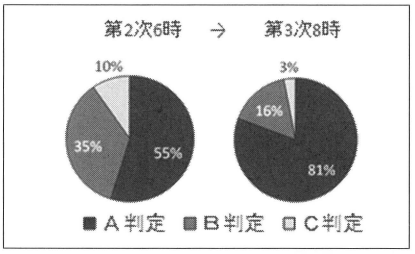

図３：思考力・判断力・表現力の評価

５　成果と課題

思考力・判断力・表現力を育成する観点から造形表現活動を考え，視点を明確に共有しながら学級全体で学び合う場を設定し，高め合う授業づくりに向けて単元を構想した。

教師が子どもの学びや授業を評価し，適切にはたらきかけを行うために，とらえるべき子どもの姿を今一度整理し，明らかにすることにした。次の五つの点を，子どもをとらえる視点として定めた。

> ・子どもが題材のどこに思いを向け，どのように感じているか。
> ・自分が受け止めたものを，どのようにつくろうと発想しているか。
> ・表したいことのために，材料や用具，表し方などをどのように選びだそうとしているか。
> ・周囲の取り組みからどのような点のどのようなよさを気付いているか。
> ・表現活動から，これからの自分の造形表現やくらしにつながる可能性に気付いているか。

より具体的な子どもの姿から学びをとらえ，「掘り下げる」「提案する」ことを中心に据えて教師がはたらきかけを行ったことは，学びをいかすためのはたらきかけとして有効であった。

「掘り下げる」はたらきかけをして，子どもが自分の意図や心情などと作品とのつながりを意識し，自らの学びを自覚しながら造形表現の追求を進めるようにした。ポートフォリオなどを通して質的評価を重ね，作品への思いが満たされたかどうかを，量的な評価を用いて検証することも有効な手立ての一つであると考える（**図３**）。

また，子どもたちが既習の知識や技能，それまでの経験をいかして造形表現を追求するためには，子どもの必要感に応じて，試したり取捨選択したりする機会を保障することが大切である。必要感そのものを刺激したり，試したいことの幅を広げたりする上で「提案する」ことは有効である。

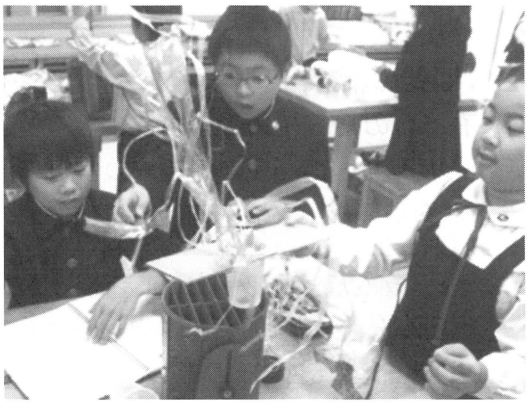

図４：その方法いいね！
作品を通してかかわり合う姿

単元および題材の構想において設定した学び合いの場面を中心に，学習記録をとり，教師の「掘り下げる」また，「提案する」はたらきかけが子どもの思考や判断にどのような影響を与えたのか，分析を行った。学級全体で学び合っている場面だけでなく，全時間を通して指導者が子どもの必要感に応じて関わっている場面や，子ども同士の話し合いの場面で考えをつないだり，確認したり，問い直したりしている場面など，より詳細にとらえることも試みた。すると，子どもの必要感に応じて学習展開や教師のはたらきかけを修正していくことにより，子どもの追求意欲が高まり，高いままに持続する様子が見えてきた。特に，子ども同士の関わりの中で見いだしたことへの追求意欲は高くなる傾向があり，思考力・判断力・表現力の育成に大きな効果を期待できる（**図３**）。学級全体で共通の視点をもって学び合ったことは，子どもが表したいと考えていることに照らし合わされ，多くの発見やつかみ取った発想が取捨選択されながら，有効なものが判断される。このように，子どもの個人思考と集団思考をつなげ学び合いを活性化させる上で，「掘り下げる」ことや「提案する」ことは有効であった。

造形表現を追求することは，個の追求であることが分かる。しかし，体験に基づいて他者と交流することによって，考えが明らかになり表現のよさに確信をもったり，自分には思いつかなかった発想を見いだしたりする子どもの姿が多く見られた。既習の知識や技能についても，子ども相互の中や教師との関わりの中で活用場面のよさが提案された。その価値を認め，共有した時，学びはいかされ，思考力・判断力・表現力は刺激され，育成されると考える。その基盤や支えとなるものが，本題材においては「素材」と「表現方法」についての十分な体験活動を保障したことであった。

図画工作・美術科において，学びをいかすということについて最大のものは，おそらく生活やくらしの中にある造形表現に活用されることである。しかし，図画工作・美術科の授業として学びをいかすことをとらえる時，ねらいを十分に考慮し，視点をしっかりと絞らなければならないと感じた。子どもが学習の中で学びをいかすためには，子どもの自らの学びに対する自覚や，その学びの深まりがどのようであったかが大切に思われた。

子どもの学びをとらえるという点において，ポートフォリオなどを用いて，子どもが追求してきた造形表現の思考過程を振り返ることは有効な手立ての一つと言える。

しかし，造形表現を追求する中で，子どもの思いや考えが生まれた根拠や，その理由が明らかになることが重要であるように感じられた。今後は，ふりかえりの中に項目立てるなどして，それを明らかにしていくことを課題としたい。

（文責　三桐　摂夫）